

森村誠一
鍵のかかる棺
下

新潮文庫



かぎ 鍵のかかる棺 ひつぎ

下 卷

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草177D

昭和五十二年五月二十日 印刷
昭和五十二年五月三十日 発行

著 者 森 村 誠 一

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便 番 号 一六二
東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一
電 話 業 務 部 (〇三)(二六六)五一一
編 集 部 (〇三)(二六六)五四二
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

鍵のかかる棺

下 卷

森村 誠一 著

新潮社 版

鍵のかかる棺
下巻

九月の初めごろから、部屋を一括して予約する客が目立ちはじめた。部屋の「ブロック予約」は、航空会社などが、乗組員のために年間を通して数部屋を押える場合に行われる。

ブロックした期間は、部屋の利用の有無にかかわらず、料金を支払う。ホテルの一定スペースを一定期間、専用のために封鎖してしまうところからこの呼称がある。この種のブロックは、長期利用のための時間的ブロックである。

これに対して、短期の利用であるが、幾部屋かをまとめて押えるブロック予約がある。これは主として団体のために二人部屋以上の部屋タイプを取る場所的なブロックである。

九月初めから目立ちはじめたのは、場所的なブロック予約であった。それも大きな団体のためではない。普通の場合のブロックと、ちよつとちがう部屋の取り方なのである。

二つ以上の部屋が内扉によって連絡されているコネクティング・ルームが二部屋あるいは三部屋とまとめて求められるようになった。この種の部屋を要求するのは、ほとんど家族連れである。それが、三十代から四十代の中年の夫婦が、数組でブロックする。

年齢、服装、趣味、話し方などから判断しても、いずれも正式の夫婦らしい。インスタントカ

ツプルにはないある種の調和が、彼らの間にはあった。

レジスターカードに記入された職業も、会社役員、商店経営、自由業等いちおう中流以上の人たちばかりである。持ち物や服装などを見ても、かなり経済的に余裕のある人たちであることがわかった。

彼らに共通して感じられるのは、秘密めいた雰囲気であった。正式の夫婦は、フロントで堂々としてゐるものである。だが彼らは、夫婦としての調和をもっていながら、人目を避けるようにこそこそとチェックインしていった。

だが、この段階では、ホテル側はまだ不審をもっていなかった。ブロックと言っても、精々、二部屋か三部屋であり、べつべつに到着するので、「目立つ現象」として、フロントに印象されてはいない。

ただ予約係が「最近コネクティング・ルームがよく売れるな」とおもった程度である。だから目立ちはじめたのは、記録の上だけであつた。

コネクティング・ルームは、ふだんはあまり売れない。コネクティング・ドア内扉をロックして、それぞれ独

立の部屋にしてあつても、部屋と部屋の間にドアがあるということが、なんとなく客に不安感をあたえるらしい。

それがそのタイプの部屋だけをブロックしてリクエストするのであるから、奇妙ではあつた。九月下旬、大阪の『日本友愛新聞社』の名義で、ツイン二十部屋をブロックして予約申込みが入った。それも、二部屋つづきのコネクティング・ルームを一単位にして十コネクティングのリクエストであつた。

日本友愛新聞とは聞いたことのない新聞であるが、半額前金デポジットを預け入れてきたので、予約を受けたのである。客室には個性がないから、突然キャンセルされても、他の客へ転売できる。これが料理や宴会となると、客種や目的によって、他客へ転用できない。法事の料理を、結婚披露宴には、出せないのだ。

したがって、料理や宴会の予約は、引受け時にかなりの額のデポジットを預かるが、客室の場合は、あまりそういうことをしない。客室代金の半額をデポジットするとは、かなり気前のいい客であつた。

日本友愛新聞の幹事は、予約にあたつて、内扉は、すべて開放するように求めた。この団体は、愛読者サービスの一環として、同社が主催した家族旅行会ということである。

コネクティング・ルームを取るからには、内扉を開けなければ、意味はない。ホテル側はべつに不審をもたず、要求を受け入れた。

当日になつた。友愛新聞の一行は、団体のふれこみにもかかわらず、夕方になつてバラバラに到着した。いずれも、三十代から四十代と見られる中年の夫婦者ばかりである。中には、五十代と目される者も、一、二組いた。二十代は、一組もなさそうだった。

別到着ではあつても、あらかじめ幹事から渡されたリストに従つて部屋割りアサインがしてあるので、チェックインに支障はない。

「この団体、どうもおかしい」

一行のチェックインを山名やまなと共に担当した大杉が、首をかしげた。

「どうおかしいのですか？ みんなまともな夫婦ばかりじゃないですか」

山名は、最後に着いた客のレジスターカードを処理してから聞いた。

「だって、そうじゃないか。団体というのにみんな別到着だ」

「ホテルを集合場所に行っているんじゃないのですか？」

「かりにそうだとしても、家族旅行というのに、だれも子供を連れていないぞ。子供がいなければ、なにもコネクティングを取る必要はないだろう」

「そう言えばそうですね」

コネクティング・ルームは子供連れの客に多く需められる。日本のホテルは、団体客を取るために二人部屋、特にツインを主力にしているところが多い。そのため、四、五人の家族連れは親と子供がべつべつの部屋に泊らざるを得なくなる。幼い子供の場合は、心配である。このようなときにコネクティング・ルームは便利だ。

ところが、子供が一人もいないにもかかわらず、友愛新聞一行は、コネクティング・ルームを要求した。しかもそれぞれべつに到着したところを見ると、たがいの間に「家族関係」はないらしい。

「家族でもない夫婦同士が、どうしてコネクティングに泊って、しかもコネクティング・ドアを開けさせたんだ？」

「さあ？」

「旅行だというのに、荷物らしい荷物をもっていた人はいなかったぞ」

「たしかに変ですね」

「こりやあ山名君、ひよっとすると、ひよっとするぞ」

大杉の目は、好奇心に燃えていた。山名の胸の内にも、一つの想像が発達している。

「ひよっとすると、何ですか？」

「わからないか？」

大杉は探るように、山名の目を見た。

「でもまさかこれだけ大勢の団体が」

山名は、自分の想像を打ち消した。

「そのまさかかもしれないよ。最近では遊びが全国的にはやっているそうだ。こりゃあ、大変な団体を泊めてしまったぞ」

「でも、まだそうと決ったわけじゃないでしょう」

「なんとか、一部屋でもいいから覗^{のぞ}くてだてはねえかなあ」

完全に好奇心の虜^{とり}となつてしまった大杉は、ホテルマンにもあるまじきことを考えているらしい。しかし内外客を接遇する一流ホテルに、覗きの仕掛けなどあるはずがなかった。

もし彼らの想像が当たつたとしても、売春ではない。夫婦が二十組、正式にレジスターをして泊つたのだ。ホテル側に追い出すべき口実はなかった。

事件は、その夜十一時ごろになつて起きた。フロントの電話がけたたましく鳴った。大杉が送受器を取り上げた。同時に電話機の電光表示板に発信している部屋の番号がオレンジ色に浮き上がる。

それは数時間前にアサインした友愛新聞一行の一部屋であつた。耳に当てた受話器に、女の悲鳴が飛びこんできた。

「たすけて！ 主人が、主人が」

あとはおろおろ声で言葉にならない。

「落ち着いてください。ご主人がどうかありませんでしたか？」

「私を強姦しようとするんです。たすけて。いや！ 私、そんなこと絶対にいやよ！ だれか、早く」

「ご主人が強姦？」

大杉は面喰った。夫婦の間にも強姦は成立するものなのか？

「早く、たすけてえ」

女の金切り声とともに、電話は先方から切られた。きっと男が、女の手から送受器をもぎ取ったのであろう。

「どうしたもんだろう？」

大杉は、どう処置したものか、迷った。女はたしかに「主人」と言った。犬も喰わない夫婦げんかにいちいち呼び出されたら、迷惑である。

しかし現に「強姦される」と救いを求めてきたものを、放っておいていいものだろうか。

「とにかく行ってみる。山名君、きみもいっしょに来てくれ」

大杉は、判断した。好奇心も大いに働いている。彼くらしいの古参になると、持ち場を離れるのに、いちいちキャプテンの許可を仰がない。

問題の部屋は、748号室である。747号とコネクティングになっている。その一角に踏みこんで二人はおもわず顔を見合せた。友愛新聞一行のすべての部屋のドアに、入室禁止札が出さ

れているのだ。それはちよつとした「壯観」であつた。新婚や秘密のデートの場合は例外なくその札が出されるが、団体の中年夫婦がすべて入室を禁止するというのは、稀有である。この札が出されると、ノックをすることもできない。だが、いまは場合がちがう。大杉は、部屋の前で深呼吸すると、コールブザーを押した。返事がない。どうやら室内で息を殺している気配だった。彼はおもいきつてノックをした。ノックをしながら、室内に呼びかけた。

「お客様、ただいまこのお部屋から、ご婦人が救いを求めてこられました。何かございましたか？」

大杉の声に、ようやく部屋の中から、

「なんでもない。帰ってくれ」

という男の返事が聞えた。

「ご婦人の方の声もお聞かせねがいたのですが」

「ぼくの家内だ。なんでもない。しつこいぞ」

と中の声があったとき、内部に人のもみ合う気配があつて、くぐもつたような声で、
「たすけて」と聞えた。男に口を塞がれている様子である。

「お客様、開けていただければ、マスターキーで、開けさせてもらいますよ」

「なんだ？ ドン・デスを出してるじゃないか。失礼な！」

男の声が居丈高になった。

「ご婦人の悲鳴をたしかに聞きました。ドアを開けなければ一一〇番を呼びます」

大杉の強硬な言葉にあつて、室内の男はたじろいだらしい。大杉は相手に時間をあたえてはい

けないとおもった。ホテル内で殺人や強盗事件が起きてから、従業員は神経質になっている。

彼は、山名に目配せすると、パスキイをキイホールに差しこんだ。ドアのロックは外れたが、内側にドアチェーンがかけられてある。彼は、ドアに体重をかけて押すと、チェーンの止め金が簡単に壊れた。ドアチェーンなどは、気休めにすぎないのである。

室内では、男女がもみ合っていた。大杉と山名が闖入して来たので、男がひるんで手をゆるめた隙に、女が二人の方へ逃げて来た。

「たすけてちょうだい。この人が乱暴するんです」

彼女は、女盛りのなかなか肉感的な肢体の持ち主である。怒っているせいもあるが、いかにも権高な顔である。ホテル備えつけの浴衣を身にまとっているが、前ははだけ、下着もちぎられて、豊かな胸が剥き出されている。暴力によって蹂躪された痕が歴然としている。

「こちらの方は、ご主人ではないのですか？」

女は、先刻主人に犯されかけていると訴えてきたのである。

「主人は隣りの部屋にいます。私、こんな人知りません。私の了解も得ずに、男だけが勝手に入れ替ったのです。主人は、いくら救いを求めても来てくれません。この人、主人と共謀してるんだわ。絶対に訴えてやる」

女は、憎悪に燃える目で、男をにらんだ。男は四十代、会社の重役タイプで、なかなか恰幅がよい。だが格好は女以上に惨憺たるものであった。女と争っている間に、浴衣のひもが落ちて、前はすっかり開いている。しかもなにも下着をつけていない。女を犯す態勢をつくるために、自ら剥き取ってしまったのかもしれない。

「冗談じゃないぞ。これは納得ずくのはずだ。現におれの女房は、この人の亭主と隣りの部屋にいるんだ。それをいまになつていやとはなんだ」

男も本気で怒っていた。

「私、そんなこと知りません。あなたが勝手にこちらの部屋へ侵^はつて来たんだわ。夫婦交換なんていやらしい。私、許さない。絶対に許さないわ」

もみ合つたはずみに傷つけられたのか、女の胸と頬にみみず腫^はれが走っている。もし女が訴えたら、かなり深刻なことになるだろう。

スワッピングによくあるケースだった。つまり男たちだけが了解して、妻の合意を取らないまま夫婦交換の場に臨んだものだから、妻が怒ったのである。

「ああ、訴えられるものなら、訴えてみる。隣りの部屋では、あんたの亭主がおれの女房と寝てるんだ。おれの女房は了解している。あんただけがいまになつてゴネはじめた。これは詐欺だぞ」

男も了解がついているとおもつて臨んだところ、強姦呼ばわりをされたものだから、騙^{だま}されたような気がしているのだろう。この場合、金品を騙し取られたわけではないので、詐欺は成立しないが、男は自分の妻を供している。妻の体をもつて購^{あがな}つたつもり^の他人の妻が、その肉体の提供を一方的に拒否した。男にしてみれば、まさに詐欺にあつた気分だろう。

「出て行つて！ ここは私の部屋よ。汚らわしいわ」

女は、大杉と山名に護られて、急に強気になった。

「おお、出て行くとも。しかしこのままじゃすまさんぞ」

男は、欲望を最も屈辱的に妨げられた怒りをこめて、女をにらんだ。

「私こそ、このままではすまないわよ」

女も負けずににらみ返した。男は、隣室へ帰るべく連絡扉を開いた。最も刺戟的^{しげき}な姿勢にからみ合った男女の白い裸身が、なんのスクリーンもおかずに彼らの目の中に飛びこんできた。

まずいことに、男がドアを開くとほとんど同時に、二人は登りつめた。抑制をかけない男女の愉悦のうめきが、おもいきって淫らで奔放な彼らの体位を、いつそう生々しいものに仕立てあげた。

「ちくしょう、よくも騙しやがったな」

男は、折り重なった二人の方へおどりかかった。これは「交換」ではなく、一方的に妻を奪われたのだ。

「あつ止めろ！」

「止めなさい」

大杉と山名は、慌てて止めに入った。ここで血を見るような騒ぎに発展したら、一大事である。大杉と山名は、男を羽交いじめにして、引き離した。だが怒った男は、暴れまわった。応援を呼びに行きたくとも、二人の力を合わせて、ようやく彼の力と対抗していられるのである。

ベッドの上の男女は、陶酔に浸るのも忘れて、いきなりおどりこんで来た「交換の相手方」を見て呆然としていた。彼らには、なぜ男がそんなに荒れ狂っているのかわからないらしい。

そのとき隣室で、女の声がした。

「もしもし一一〇番ですか。こちらロイヤルホテルの748号室です。すぐ来てください。男の

人が乱暴しているんです」

2

「あつ、よせ！」

愕然^{がくぜん}として、女を止めに行つたときは、すでに手遅れだった。女は勝ち誇つたように、電話を切つた後だった。

「英子、なんということを」

隣りの部屋から、夫が全裸のまま飛んで来た。荒れ狂つていた男も、警察が介入したことを知つて、色を失つた。とにかくこんな破廉恥なパーティをしているところをつかまえられたら、たまつたものではない。自衛本能が怒りから醒めさせた。

「英子、すぐに取り消すんだ。早く」

急訴者本人が取り消さなければ、警察は信用してくれない。

「ふん、もう遅いわよ。ここへそろそろ着くころだよ」

「馬鹿！」

夫は、いきなり英子と呼んだ妻の頬を、力まかせに張つた。みみず腫れが、いつそうくつきりと浮び上がった。

「あなた、自分が悪いくせに、よくも暴力を振^{ふる}つたわね。いいわ、みんな訴えてやるから」
英子はヒステリックにわめいた。

「おまえは、おれがどうなつてもいいのか。長良岡^{ながらおか}の家名に傷がついてもかまわないのか」